

## インスタレーションにおける空間と観客の関係に関する研究

### A study on the relationship between installation art spaces and audiences.

○山中基暉<sup>1</sup>, 大川碧望<sup>2</sup>, 佐藤慎也<sup>2</sup>

\*Motoki Yamanaka<sup>1</sup>, Aono Okawa<sup>2</sup>, Shinya Satoh<sup>2</sup>

In contemporary art, installation art is positioned as an expression that uses the entire space as a work, and since the 1970s, it has become a general term for a group of works that treat the entire space through artistic manipulation. However, as "images" and "sound" became the constituent elements of works, the concept of installation art expanded, raising the question of how viewers should perceive the space of works. Therefore, in this study, we clarify the relationship between the space and the audience when the work expands into space.

#### 1. 研究背景・目的

現代美術において、インスタレーションは空間全体を作品とする表現手法として位置付けられ、1970年代以降、芸術的操作のなされた空間全体を扱う作品群の総称として一般化している。しかし、映像インスタレーションやサウンド・インスタレーションなどのように、「映像」「サウンド」が作品の構成要素となることで、インスタレーションの概念は拡大している。インスタレーションは、絵画や彫刻を逸脱し、観客が身体を通して体験できるスケールを持つことで、観客と作品との関係を重要視するものであると言える。さらには、ホワイトキューブでの展示から離れ、芸術祭のような地域での展示へと発展する。

このようなインスタレーションの展開は、作家が幅広い表現方法で、作品と観客の空間をつくり上げることができるようになった一方で、観客は作品の持つ空間をどのように認識するのか、という課題を発生させた。

そこで本研究では、作品が空間へと拡大し、観客との相互関係をもった歴史を探り、作品と観客の関係を明らかにすることを目的とする。また、本研究が美術館や地域芸術祭での展示計画の一助となることを期待する。

#### 2. 研究方法

これまでの美術史を通して、作品が空間へと拡大した変遷を辿るほか、インスタレーションにおける空間と観客の関係について、文献調査によって明らかにする。

#### 3. 概念から空間への拡大

かつての絵画や彫刻が占めていた美術作品から、現代における概念的な作品へと拡大の契機をもたらした作品として、マルセル・デュシャンの《泉》(1917年)があげられる。既製品までもを作品として用いることで、その有用性の意味を排除した。デュシャンは、既製品の選択が視覚的な美的楽しみに左右されないことを重要視し、その既製品を選び、新たな題目と視点を与えるという一連の「プロセス」を作品とした<sup>1)</sup>。

それまで、絵画や彫刻は物理的な「もの」としての美的な経験であったのに対し、作品制作における「プロセス」が作品化したことで、物理的な「もの」以外のいかなるものでも美術作品になり得るといった素材の拡大と、作家の行為や身振りまでもを作品として捉える「レディメイド」が発見される。レディメイドの発見以降、アメリカで誕生するミニマリズムを通じて、徹底的に装飾を排除した彫刻作品が展示空間と一体化し、空間までも作品として捉えるインスタレーションへと発展する。作品が空間へと拡大して、身体的スケールを持ち、観客が作品空間に入り込むことができるようになることで、作品と観客に相互関係が生まれ、観客が作品の一部として取り入れられるようになる<sup>2)</sup>。

#### 4. 空間における観客の存在

観客が作品の一部として取り入れられる傾向は、ミニマリズムの作品から考えられ、批評家のマイケル・フリードは、「芸術と客体性」にて、ミニマリズムの作品を「演劇的」とであると批評している<sup>3)</sup>。

1:日大理工・院(前)・建築、2:日大理工・教員・建築

ミニマリズムは、徹底的に装飾を排除した彫刻作品が展示空間に設置されることで、シンプルな見目の下に何か背景があるのか、それともただの「もの」なのか、という「記号かものか」という二重性を生んでいる。それにより、観客は作品がいかにかそう表されているのかという「解釈のプロセス」を踏む<sup>4)</sup>。作品そのままの「もの」としてでも十分でなく、作品の持つ「意味深さ」だけでも十分でない。

ただの産業的な素材の幾何学形態でしかないミニマリズムは、それ自体では空虚で、それが故に鑑賞者のなすがままに存在する。つまりミニマリズにおける作品は、鑑賞者ありきのもので、観客の作品との関係や解釈のプロセスを前提としており、作品は観客を「包含」している。

インスタレーションもまた、作品そのままの「もの」としてでも、作品の持つ「意味深さ」だけでも十分でなく、観客を「包含」している。そして、フリードのいう「演劇的」な経験、つまり解釈のプロセスをもたらず。両者の違いは、ミニマリズムの作品がモダニズムに特徴的な無駄のないシンプルな作品であり、ホワイトキューブという芸術のために用意された空間に置かれるのに対し、インスタレーションは展示空間だけでなく、その外部のあらゆる場所に設置される。そして、物体としての「もの」だけでなく、映像や音楽といった様々なメディアや素材を用いることで、観客はあらゆる空間を経験することができる。

## 5. 日常への連続性

伝統的な芸術経験（絵画や彫刻）はホワイトキューブで行われ、作品の意味は自律的な作品の内部にのみ存在するため、観客は無関係であり、客観的に作品を認識する。一方で、インスタレーションは、先に述べたように作品の意味は作品と観客の関係のうちにあり、作品を客観的に認識することはできず、観客が作品を経験することで認識することができる。美術評論家の中原佑介が「人間と物質」<sup>5)</sup>で、現代美術において素材とならない物質は皆無だと述べるように、様々な素材の拡大における物質の造形の手段によりインスタレーションでは、作品の経験へと観客を誘い込むために、日常的な素材や場を用いている。そして、それによって作品経験をより身近なものにすることで、普段は意識されない観客の日常的行為を、芸術体験という特殊な経験を通じて想起させる。今日では、美術館という芸術のための展示

空間から飛び出し、地域を活用した芸術祭からも日常的な素材や空間を用いた作品が見受けられる。ここで重要なことは、単に日常的な物質を素材として利用することではなく、日常的な素材を利用し、様々な問題をテーマに取り上げて作品を制作することである。そしてインスタレーションが、これまでの美術館という場を飛び出し、街や自然をひとつの場として捉えることで、場と作品、作品と観客、観客と場というような関係が生まれる。それにより、絵画や彫刻に見られるような芸術的な問題だけでなく、社会問題や政治、人種など、観客の身近な問題を身体を通して経験することにある。それは、観客が日常生活へ戻っても保存され、社会や他者に対する思想や行為が改善されうる。この連続性により、観客はもはや単なる鑑賞ではなく、体験的な鑑賞を経験することで、身体を通じて作品と日常生活との関わり方を更新することができる。

## 6. まとめ

インスタレーションの空間と観客の関係について、ミニマリズムから考えられてきた概念を文献により調査することで、空間における観客の関係が見えてきた。さらに、観客の空間との関係は、ホワイトキューブではない場所性も重要であることがわかった。今回は、最初期の文献を対象とした調査にとどまったため、今後は様々な作品の事例を分析し、作品と場所との関係やその空間と観客の関係について調査を進めていく。

## 参考文献

- 1) マッシュー・アフロン：デュシャン 人と作品，フィラデルフィア美術館，2018.10
- 2) 大岩雄介：クレア・ビショップ「インスタレーション・アート：批評的歴史」大略，2020.7  
<https://euskeiwa.com/writings/online/20200713installationartbybishop.html>
- 3) マイケル・フリード：芸術と客体性，批評空間臨時増刊号，モダニズムのハード・コア，太田出版，1995.3
- 4) 大岩雄介：ユリアーネ・レーベンティッシュ「インスタレーション・アートの美学」大略，2020.11  
<https://euskeiwa.com/writings/online/20201025aestheticsofinstallationartbyrebentisch.html>
- 5) 中原佑介：人間と物質（1970），中原佑介美術批評選集 第五巻 「人間と物質」展の射程——日本初の本格的な国際展，現代企画室＋ BankART1929，2011.8